

二〇二四年(令和六年)五月一日發行(毎月一回一日發行)

香蘭

第一〇一卷第五号

村野次郎創刊

# 香蘭

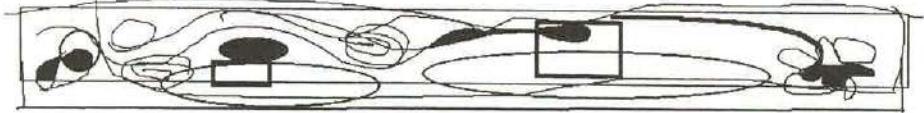


2024年(令和6年)5月号

第101卷

第5号

通卷1121号



# 香蘭

2024年(令和6年)5月号  
第101巻 第5号 通巻1121号

## 目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(105) ..... 千々和 久 幸 表二  
招待作品(奇数月連載)④空の鍵盤 ..... 加藤 英彦 2  
作品

### 二

#### 推薦香蘭集

#### 香蘭集

### 三

#### 香蘭集

作品一 十首選(三月号) 千々和久幸選

柳沼きよ子  
千々和久幸

作品二・三 十首選(三月号) 桜井京子選

柳沼きよ子  
千々和久幸

一頁公論(36)名前

柳沼きよ子  
千々和久幸

村野次郎への旅(169)昭和期の「香蘭」(四)

柳沼きよ子  
千々和久幸

「香蘭」とともに(7)「佳きうた」

柳沼きよ子  
千々和久幸

続・酔風船(5)酒の自叙伝(二)

柳沼きよ子  
千々和久幸

私の読む現代短歌(24・最終回)山埜井喜美枝

柳沼きよ子  
千々和久幸

エッセイ・自由研究 本の世界に遊ぶ

柳沼きよ子  
千々和久幸

作品評(三月号) 二句切れの歌を味わう

柳沼きよ子  
千々和久幸

#### 作品一

佐伯弥生

丸山三枝子

佐伯弥生

田中あさひ

岩田明美

小原裕光

田村久美

澤田久美子

田中あさひ

目次・緑地帯カット

82 表二

表紙絵 山口蓬春「桃」

和田和雄

七首抄(三月号)  
耳言あれこれ(29・最終回)「推定」の助動詞「めり」について  
緑地帯

他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向  
明宝研究会第一四九回一月例会 私の読んだ「和泉式部日記」  
歌会及び会合・会員消息・他

編集後記・新宿日記

他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向  
明宝研究会第一四九回一月例会 私の読んだ「和泉式部日記」  
歌会及び会合・会員消息・他

編集後記・新宿日記

表紙絵 山口蓬春「桃」

目次・緑地帯カット

82 表二

和田和雄

千々和 久 幸

村野次郎作品 私の愛誦歌（105）

遠くより夕映え寒くとどきゐて

暮れきらぬものの形をとどむ

『香蘭』に入会して間もなく誌面でこの一首を読み、ああ短歌はこんな奥深い把握が出来るのだと言息をついた。さりながらどこがどう奥深いのか、なぜこの一首に立ち止まつたのか、自分にもうまく説明が出来なかつた。

だけが暮れなすんでいると夕光景を再現しながら、こんな緻密で技巧的な歌は逆立ちしてもオレには詠めないと首を振つた。

今にして思えば概括的な一首だが、いかにも冬の心細い雰囲気を捉えた歌である。気になるのは三句の「とどきゐて」の接続、「とどききて」なら滑らかになるが、初出の膨らみは薄らぐ。先生はその個所のたゆたい感を大事にされたのだろう。

初出は『香蘭』昭和三十四年（1959）十二月号の「日のひかり」で、後に『村野次郎三百首』にも収録された。

『村野次郎歌集』

（短歌研究文庫『村野次郎歌集』130頁、『村野次三百首』83頁に掲載）

加藤 英彦

## 空の鍵盤

老いるとは身にねむる魚いちまいの水面をゆらしみどりを揺らし  
このあたりと医師が指さす老い母の胸腔にひかりの潦水みなもにわなずみ

配膳の食器ふれあう音はして病室の朝に搬ばれてゆく

白梅はいま盛りなり母の窓からは見えざるいのちのしづく

まぼろしの子は来ているかいくひらの枯れ葉を落とすように忘れて  
里に下りきて事故に遭う夕ぐれのテレビはひとりの死を報じおり

津軽はいま吹雪きてやまず臥す母の左右の指さきが宙に游べり

日ごと濃くなる譖妄ストレッチャーに炎えあがるウクライナもガザも視えてはおらず  
笑顔で手をのべ来る母よ搬送車モービルに臥してオペ室のなかに消えたり

いつか母に見せたしたぶん果たせざる降りつむ雪の合掌造り

## ◇ 招待作品 ◇ 奇数月連載④

十秒前の記憶がない。母は夥しい今を生きているのではないかと思うことがある。昔から猫舌なので、舌先で熱いと感じれば煮魚はゆっくりと皿に戻す。数秒もするともう忘れている。サラダの器にその煮魚を混せて麦茶のカップに入れて浸しはじめる。心尽くしの一品ができる。そして食べなさいと真顔でわたしのほうに差し出すのだ。

わたしはたぶん息子ではなく、さつき母が探していた子の一人なのだろう。もう探しにいたことさえ忘れている。テレビのリモコンや木の箸置きを食べようとしたこともあった。「それは美味しい」と母の伴侶がやさしく手からとりもどす。

きっと過去の匣に蓄積されない無数の今を生きているのだ。「篤志はどこ?」と母が弟の名を呼ぶ。篤志おじちゃんは埼玉の施設にいるよ、暖かくなつたらみんなで会いに行こうねと彼が耳もとで囁く。母は小さく頷いてまた箸先をはじり始める。篤志叔父はもうずいぶんと昔に亡くなっている。

記憶などは本当に必要なのだろうかとふと思う。だれも無数の今を生きているのだから、

その今が楽しかったり嬉しかったりすればそれでよいではないか。でも、なぜあんなに苦しく顔を歪ませるのだろう。たぶん自分でも説明のつかない焦燥や不安が渦巻いているのだ。十秒後には忘れてくれればよいのだけれど、それはいつも繰り返し現れる。今このだから消えることがない。

その母が先日転倒して右大腿骨を骨折し、救急搬送で入院した。血糖値の異常な高さとかかるいコロナの微熱や、双胸にたまつた水を一旦体外に排出しないと手術はできないとのことで、まずは当面の体内治療が優先する。翌日、母の伴侶と姉とわたしは再び病院を訪れたが、母は仰向けのまま指を宙に泳がせていた。ああ、また鍵盤で何かを弾いているつもりなのだ。転倒したこともここがどこなのかも覚えていない。理由のない痛みだけが今の自分を確かめる手立てである。

母の語りには前後の脈絡がない。伝えるべきことばを喪失しているので、不連続な断片からその意図を類推する。わたしたちの同意は意味の了解ではなく、伝えたい意思の確認である。そんな中で痛いという身体的な痛覚だけが心の叫びとして伝わってくる。

# 四選者 の作品

日々の形見

平塚 千々和 久幸

身から出た鏽だと今は諦めるほかなし木瓜の花返り咲く  
狂わざる時計というも何がなし疎ましきもの用なき身には  
議論して決める話ではあるまいに顔が揃えば口数の増ゆ  
美しき同志であつたと消え行きし日々の形見を黒塗りにせり  
真っ直ぐにものを言いくるこの人を疎みて長く親しみ来たり  
梅林に行き美術館に行き酒を飲みそこにわたしが生きていた昔  
神思うことなどなけれ強風に煽られ始発電車を待てり

ローレライ

横浜 渡辺 礼比子

壁の染みが苦悶の顔に見える日よ今日は身の丈越えて励みき  
賀状仕舞いされたる方に賀状出し心こもれる返事いただく  
計を聞けば感慨のありこの日頃忘れていたる庄司歌江よ  
市境に住めば日々聞く横須賀の有線放送「夕焼け小焼け」  
改札でもたもたすれば妹が声低く言う「バスモに紐を」  
担当医に問われておりぬ 食欲の落ちたる母のこれからのこと

下戸亭主をほんのり酔はせてしまひたり樽平酒造板粕の炙り

年経りて良き顔となれる歌手ありき存外に早く逝つてしまへり

もつと相手の嫌がることをしませうとサッカーリーグ解説者は嬉し気に

用品回収のやうに問はれたり「お悩み事はありませんか」と

もう少し働いてよしの御籠引くそんな気持だ精検のシロ

巫女舞の鈴のごとくに振つてみる八重水仙を摘んで束ねて

朝の食卓 我孫子 丸山 三枝子

ところどころ雪の残りて水仙の香りたちくる傍らを行く

予報士が春一番と告げいたる風か背中を押され駅まで

老齢の櫻と思う つぎつぎと飛びくる夕のカラス泊まらせ

雨の日の道に会いたる友のよう濡れて歩める四十雀きみ

殺人の謎解きだけが面白い訳でもないが終わりまで見る

灯を消せば壁に大きく現れて子犬のかぐろき形象

あからびく朝々食べて飽きたもあらぬバナナを食卓に置く

列なりて北へ北へとゆく鳥の後ろへ翔ぶということなくて

きょうだいのライン会議の結論は搖るがず 母に胃瘻はしない  
老耄の母が深夜の病院のベッドに歌うローレライの歌

不用品回収

鎌倉 高畠 憲子

山形といへば樽平酒造の酒粕の到来ありて亭主破顔す

# 作品一 十首選



(三月号作品から)

千々和 久 幸 選

・おしゃべりな少女のように雪が降る誰かが扉を開け放つまで

中村かよ子

雪が「おしゃべりな少女のように降る」という卓抜な比喩がまず目を引く。そしてそのおしゃべりは誰かが扉を開けて（少女を）外に連れ出すまで止むことがない。下句はうつかりすれば説明に陥るところを、上句の吸引力がしっかりと支えている。

このように現実がそのまま詩の地平に紛れ込んでしまう資質は、この作者の独壇場である。「香蘭」では入会当初からもつとも注目し

た作者である。

・丁寧に言葉かさねて思ひやり溢るあなたがほんたうは苦手

桜井 京子

作者のうんざりした表情、遣り切れなさが伝わってくる。読者もまた鬱陶しい思いでこの親切の押し売りに顔を背けて読むだろう。

人間生きていて何が面倒で何が煩わしいかと言えば、恐らくは対人関係の泥濘であろう。この泥濘に足を取られれば、そこからの脱出は容易ではないからである。

対人関係もまた「過ぎたるは猶及ばざるが如し」で、「君子の交わりは淡きこと水の如し」がベスト。心すべきことである。

・足向けて眼れませんとわれに言う上司はきっと足向け眠る

川原 優子

作者は、この古狸めつとせめて短歌で恨みを晴らそうとの歌で一矢を報いたのだ。初句の語源は「足を向けて寝られない」と広辞苑にはあるが、それはまあよい。古い俚諺に「閣下、あなたのためならいつでも命を捨てます」と臣下が言うときは死ぬ必要のない時だ、がある。彼の社交術の歴史を思うべし。

上司はきっとこの作者に「きみにしか頼めない仕事だから」とか何とかキラーフレーズで、無理難題を押しつけたに違いない。そしてみごと問題解決の後には、満面の笑みで「足むけて眼れません」と勞ったのだ。作者は上司の手の内は先刻ご承知で、歌で仇を取つたのだ。いつの時代も組織には、狸や狐が棲んでいるものだ。

・靴の紐しめてる暇に飲み仲間四散しめぐりにだあれもない

飯島智恵子

現実をそのまま歌っているが、それが飯島的「現代の御伽噺」になるところがペテランの味。飲兵衛はあれだけこゝう我が儘なもの、誘うときは熱心だが自分が酔つ払うと人の面倒はものは、帰りの挨拶もなくスタコラサッサである。彼らは大方誰かと示し合わせて第二次会にでも行く気なのだろう。まったくの礼儀知らずがなどと言つては、酒付合いは出来まい。

・家並の影を踏みゆく束の間は影を持たないわたくしである

大井田啓子

「影を持たないわたくし」という下句の、何か象徴的なフレーズに惹かれて採つたが、一首はやはりアリズムの世界のものだろう。

しかしこの下句があれば何処へでも飛翔できよう。

例えば一連の他の作品と結びつけられ、「信号を待てる車列が戦車とも影を持たないわたしが見ている」とでもすれば、新たな世界が立ち上がりそうな気がする。

極端な言い方をすれば、一首の中に一つでも際立つたフレーズがあれば魅力ある作品と、今のわたしは言いたい気がしている。

#### ・本当のことを書けないとときもあるとときどきつける日記帳には

松沢みどり

おそらく日記帳は多かれ少なかれこのような書き方をされているのだろう。古いテレビのコマーシャルに、少年の呟きで「…と日記には書いておこう」という卓抜なフレーズがあった。ということは、日記帳はいずれ誰かに読まれるという暗黙の前提があつてのこと、だつて歌人は日記どころか、他人が読めば恥ずかしい私生活の内奥まで臆面も無く短歌にするではないか。現に詩人で小説家の富岡多恵子は、かつて短歌を「羞恥心の隠蔽装置」と言つたものだ。松沢さん、以て如何となす?

#### ・何もかも判つていては詰まらない庭の梅の木に蓑虫さがる

宮原  
迪恵

上句は何か深遠なことを言おうとしているようで足を止めだが、下句を「枕草子」に絡めると面白味が増す。「虫」の章には「蓑虫はいとあはれで」「ちちよ、ちちよ」とはかなげに鳴く、いみじうはれなり」とある。この歌とは直接関係はないが、ふと思いついた何事も判つていなければ、判りたいといふ好奇心が騒ぐ。そしてそれが人の足を止める。

つまり何もかも判つていてはつまらない、判らないのはさらにつまらないと歌意を先取りしてしまえば、大きなお世話になろうか。・代表はすぐに煙に巻くと言う百子さん酔つて幾度も言う

八木橋洋子

さしすめこの歌、「代表とはオレのことかと評者言い」である。かくのことく束になつて(?)掛かって来られれば、「衆寡敵せず」である。素直に読めば煙に巻いたのは代表となるが、「代表を」とすればたちどころに攻守は逆転する。コチラの方が実態に近いと思うのは代表のヒガミか。酒が飲めない作者は安全地帯にいる。

#### ・推敲をみなでしている友の歌だんだんおかしくなりてゆきたり

伊藤美恵子

よくある話である。おそらくこの愛すべき友たちは、いつもこうして他の歌友にカモられているのだ。で、「おかしくな」った歌の品質保証は誰がするのかね。「船頭多くして船山に上る」という戒めもあるが、わいわいガヤガヤ倫しむのもまた歌会である。

#### ・ラ・フランスの一箱届きそののちはラララフランスの心になりぬ

江口  
編代

これほど対象に没入をした歌は珍しい。没入どころか、対象に同化しラ・フランスになつて仕舞つたのだから見上げたものだ。「実相観入」もへつたれもあつたもんじやない。きっと作者は今ごろラ・フランスになつて共に歌い出しているに違いない。

# 作品一、三 十首選



(三月号作品から) 桜井京子選

・面舵も取り舵もなくひたすらに真っ直ぐ進めば棒にも当たる

庄司 健造

一首全体が暗喻にこままでいて奥深い歌。船橋の航行において、進行方向の右に舵を取れば面舵、左に取れば取り舵だが、直進すればどうなるか。その答を作者はいろはカルタの「犬も歩けば棒にあたる」に援えて答えている。ところが「棒に当たる」はなかなかクセモノで、「何かしようとするれば災難に遭う」と、「何かすれば思わぬ幸運に会う」の両方の意味がある。はたして作者が狙つたのは災難か幸運か。だが、面舵でも取り舵でも、進めば必ず何かに遭遇するのではないか。などと理屈を言い出せば、これはすでに作者の術中に惑わされている気もする。香蘭の本社歌会で活躍する作者。災難も幸運もものは、今はただ突き進むのみ、である。

・いつまでも吾に付き纏ふ今日の月独りになりたい夜もあるのに

田村 久美

ある日の帰り道、ふと気づいた夕空の月。月はどの路地を曲がつてもついて来て、家に帰れば窓から覗いている。まるでストーカーのような月だ。この日、作者は何か弾まぬ思いを抱えて戻ってきたものか。月は人が見上げるものだから、月からつき纏われていると

いう着想が新鮮である。月は見る側の心の持ちようで如何ようにも歌える。古来、月には数えきれないほどの名歌があるが、あたかも月が鬱陶しいかのように歌うこの作品は異色と言えよう。

・木炭で描いたヴィーナス練り消しで消したところに射しこむ光

中村陽子

デッサンでヴィーナスを描く作者。作品を完成させるまでには、何度も書いたり消したりを繰り返すのだろう。「練り消し」という柔らかな素材を使い、丁寧に細やかな作業に取り組む作者の、画家としての表情の見える歌である。消したところに射す光を捉えた眼差しは、微かなためらいを思わせる。絵画に没頭する濃密な時間がここにあり、それは作者だけが知る至福の時もある。

・ゆうまぐれ自転車漕いで宍道湖の夕陽の見える公園に行く

馬場美信

松江市在住の作者にとって宍道湖は生活圏の中にあり、折に触れて歌を詠み、心を遊ばせる場所なのだろう。わけても宍道湖に沈む夕陽は美しく、かつて私が松江支部歌会に招かれた折には、歌会の会場が湖に夕映えが見えることを売りにした部屋であった。当日は、あいにく宍道湖に夕映えはあらわれなかつたが、支部の方々が大変残念がられたことが記憶にある。宍道湖のほとりに暮らし、抒情豈かな歌をこれからも作り続けてほしい作者である。

・実のすべて採りはらわれて空高しカリン一樹はしばし放心

安田恵子

たくさんの中を穂らせたカリンの樹が、剪定されてしまい、実も枝もとも無くなってしまったのだろう。色づいて確かにあつた筈

の実が失われ、その後のカリンの樹を擬人化して巧みに歌っている。美しい青空とその下のカリンの孤高、あるいは虚無感にも似た気分を捉えたところに、この作者の凡庸ではない感受がある。青空の向こうに安堵と開放感、もしかしたら言い知れぬ悲しみを見ている作者を想像したのだが、それは深読みが過ぎるかも知れない。

・正月より早く来いとも思われぬに今年も勝手にやつて来るなり

生田 編代

子供の頃は「早く来い来い」と歌つて待つものだつた正月が、いつの間にか向こうから勝手にやつて来るようになつた。これは年齢を重ねたことによるものだ。年に一度、誰の上にもやつて来る正月。可笑しみと老いに向かう微かな嘆きがあり、共感できる歌である。

・有り難う一年間の総決算収穫のミカンをコンテナに積む

柏原 貞雄

因島に住んで長年蜜柑を作り続けている作者である。島の蜜柑畑は平地ばかりではないため、収穫までの作業は大変な苦労があることだろう。立派に稔った蜜柑をコンテナに積み込めばほつとひと息、一年間の苦労の報われる瞬間である。初句の「有り難う」は、豊かに稔ってくれた蜜柑に対してであると同時に、自らにも言つている気がする。一年間、本当に疲れさま、と。

・葉を散らす駅前広場の大櫻秋は私を追い越してゆく

川久保百子

晩秋の一斉に枯葉の散る季節、追い越して行くのは風に舞う枯葉の方だが、秋が追い越してゆく、と捉えたところに、詩人の目がはたらいている。季節が急ぎ足で冬に向かって行く中、作者はドラマ

のヒロインのように、しばしせンチメンタルな気分で立ち尽くしたのだった。

・定年後墨継ぎもなく過ぎる日々今では文字も読み始めなま

小城 勝相

「墨継ぎ」とは、書道用語で筆に含ませた墨が乏しくなった時、さらには筆に墨を含ませることである。この一首では比喩的に用いられており、定年を迎えた後、新たなライフワークを模索するインター<sup>バ</sup>ルを歌つたものか。「墨継ぎ」がやや際立つが、下句と照應しており、ユニークな読み口である。現役時代は蓄積した豊富な知識を生たちに伝え続けて来た作者。かすみゆく文字に力を込めて、まだまだ為さねばならぬことがある筈である。

・約束をドタキヤンされてこの夕ベオペラ座のシャンデリアが落ちた

藤田 祐恵

「オペラ座の怪人」は、フランスの作家ガルトン・ルルーの小説をもとに作られ、これまでいくつもの映画やミュージカルがある。日本でも劇団四季のミュージカルで人気を博し、昨年、上演三十五周年を迎えている。怪しい雰囲気のなか、劇中にシャンデリアが落下する場面があり、作者はそのことをイメージして歌つている。

右の作品は、約束を急に反故にされた怒りと驚きを凝視し、実際に「オペラ座の怪人」を観に行く予定であつたかも知れないが、まったく関係がないと読んでも差し支えない。要するに「青天の霹靂」であつたと言いたいのだ。約束が果たされなかつたという事実から飛躍し、オペラ座のシャンデリアを落としてしまつたオーバーアクションが何ともあつぱれと言うはかはない。

## 「香蘭」とともに（7）鈴木 桂子

### ——佳き歌——

「いい写真」とうまい写真是ちがう。ダメな写真とへタな写真も同じ意味じゃない。うまくてダメな写真もあるし、へタだけいい写真もある。「いい写真」を知って「いい写真」を撮ろう。」

ある写真家が、これから写真を始めようという人あるいはまだ始めて間もない人に向けて語った言葉である。ここで「写真」を「短歌」と置き換えるれば、それはそのまま短歌を詠む私達に向けられた言葉として読むことができよう。ジャンルは違うが、示唆に富んだ言葉として、初心の私はそれらを読んだ。それでは、「いい写真」とはどういうものなのか。その間に筆者は、答は自分で出さなければならない、それは哲学みたいなものなので、いろんな答があつて当然のものなのだ、と答えている。その上で、まずは「へタでもいい写真」を目指すことから始めよう、と呼びかけている。「うまい」よりもまずは「いい

写真を。短歌も同じであろう。まずはヘタでも「いい」短歌を作ることからである。

結社には歌歴の長い人もいれば短い人もいる。プロの歌人もいれば初心の人もいる。ただ目指しているのは、プロ、アマの区別なく「いい歌」、そして「へタではない」「うまい」歌を作ることであろう。

・年老いて身にほしきものあらねどもただ一  
つほしわれの佳き歌

村野 次郎

「佳き歌」は歌を詠む人なら誰しも目標にしたいものと思う。現会員の方々も同じ思いを胸に、月々の作歌に励まれているに違いない。

私達は作り手であると同時に読み手でもあらねばならない。詠むことに追われがちだが、

読む力の重要性を最近は強く思う。あの瞑むような目をした少女の絵で知られる奈良美智氏が、ハイカルチャ―の思想で画いた絵が、ローカルチャ―としてただの商品のように消耗されていくのを嘆かれていたが、短歌にも同じような現象が起こらないとは言い切れない。まずは、読者として月々委ねられる香蘭の作品において、「佳き歌」を見落すことのない読みを心がけたい。読むとは読み手の「私」を越えて「他者」とつながることである。ここまで「他者」を理解しながれるか、読者としての力量もまた問われている。

香蘭を支えて来たものなのである。一〇〇年を機に改めてその歩みを思う。

ところで「佳き歌」とはどのようなものを言うのだろうか。短歌は「詩」であり「文学」でなければならない、とは香蘭の教えであるが、「詩」とは、「文学」とは何なのか。それが、  
月々の詠草は「詩」あるいは「文学」を模索しつつ、「佳き歌」を目指して作られた作品群といえよう。キャリアや力量によつて、「詩」や「文学」観は作者それぞれであるが、私達は自分が「詩」あるいは「文学」と信じるものを見、懸命に詠むしかないとも言える。そして、それらの歌の佳き、悪しきはまた読み手に委ねるしかないものである。

月々の詠草は「詩」あるいは「文学」を模索しつつ、「佳き歌」を目指して作られた作品群といえよう。キャリアや力量によつて、「詩」や「文学」観は作者それぞれであるが、私達は自分が「詩」あるいは「文学」と信じるものを見、懸命に詠むしかないとも言える。そして、それらの歌の佳き、悪しきはまた読み手に委ねるしかないものである。

月々の詠草は「詩」あるいは「文学」を模索しつつ、「佳き歌」を目指して作られた作品群といえよう。キャリアや力量によつて、「詩」や「文学」観は作者それぞれであるが、私達は自分が「詩」あるいは「文学」と信じるものを見、懸命に詠むしかないとも言える。そして、それらの歌の佳き、悪しきはまた読み手に委ねるしかないものである。

月々の詠草は「詩」あるいは「文学」を模索しつつ、「佳き歌」を目指して作られた作品群といえよう。キャリアや力量によつて、「詩」や「文学」観は作者それぞれであるが、私達は自分が「詩」あるいは「文学」と信じるものを見、懸命に詠むしかないとも言える。そして、それらの歌の佳き、悪しきはまた読み手に委ねるしかないものである。

月々の詠草は「詩」あるいは「文学」を模索しつつ、「佳き歌」を目指して作られた作品群といえよう。キャリアや力量によつて、「詩」や「文学」観は作者それぞれであるが、私達は自分が「詩」あるいは「文学」と信じるものを見、懸命に詠むしかないとも言える。そして、それらの歌の佳き、悪しきはまた読み手に委ねるしかないものである。

月々の詠草は「詩」あるいは「文学」を模索しつつ、「佳き歌」を目指して作られた作品群といえよう。キャリアや力量によつて、「詩」や「文学」観は作者それぞれであるが、私達は自分が「詩」あるいは「文学」と信じるものを見、懸命に詠むしかないとも言える。そして、それらの歌の佳き、悪しきはまた読み手に委ねるしかないものである。

## 続・酔風船（5）

千々和 久幸

### 酒の自叙伝（11）

過日、本エッセイの熱心な読者からこんな電話があった。その一問一答を再現してみよう。

—拝見しましたよ。「酒の自叙伝（1）」を……。

—いやあ、面白もございません。何だか早口で喋ってしまって。

—でもセンセイ、あれってやはり自慢話ですよね。

—ええまあけつきよくは、そういうことになりますかね。

—ボスとお書きになつてますが、社長さんですよね。それにJ.Cの

そもそもが不案内でビンときませんでしたが…。

—社長が理事長を務めた（東京の）青年会議所は、正しくは Junior Chamber International Japan、通称は日本青年会議所の東京ブロッックといふことです。

—ということは世界的な組織ですね。

—もちろんそうです。日本国内の684地域に、世界では118か国

に組織があります。

—申し訳ありません、それについていたい何のための組織ですか。

—簡単に言えば、リーダーを志す青年経済人の訓練機関みたいななどろですね。入会は二十歳からですが、満四十歳で卒業です。

—それじゃその後はどうするんです。

—ま、大方のメンバーは会社の代表者か取締役かで、卒業後は経済同友会か商工会議所へ進みますね。

—それでセンセイはメンバーだった。

—いいえ、その年代ではわたしは労働組合の闘士（？）でしたよ。遠いところから見ていましたが、メンバーがお坊ちゃんみたいでギザに見えましてね。

—ところで「酒の自叙伝（2）」に話を戻しますが、お酒はお強かつたんですね。

—ははは、舍弟に言わせれば「兄貴は酒飲みではなく、酒好きだ」ということらしいですよ、意味はよく分かりませんがね（笑）

—酒の効用なんであるんですか。

—現役の頃はもっぱら社交の酒でしたが、個人的には息抜きか退屈凌ぎですよ。そうそう太宰治がこんな事を言つてます。

—昔は、これに依つて所謂浩然之氣（こうぜんのき）を養つたものだそうであるが、今は、ただ精神をあさはかにするばかりである。近来私は酒を憎むこと極度である。いやしくも、なあるところの人物は、今日此際、断じて酒杯を粉碎すべきである（「禁酒の心」）とね。

—ナルホドなるほど、飲み過ぎるところなんですね（笑）

—ええまあね。ですが未だ憎むより浩然之氣を養う方です（笑）

—酒に功利、効用を求めてはいけませんね。

—仰る通りです。酒はただ愉しんで飲めばよろしい。独酌は辛氣くさくてイケませんが、人生を語れる友と飲む酒ならば、きっと寛げて愉しい酒になりますよ。

—あ、センセイ、そろそろ晩酌のお時間ですよ。

## 昭和期の「香蘭」（四）

千々和 久 幸

ふかきりんどう  
冬枯の梢にのこる櫨の實のかわきもしるぎ  
タヤケの空 四賀 光子

前回に続き昭和二年（1927年）二月號を読んでいくことにする。前月歌壇合評で取り残した個所をいま少し読もう。

アララギ

大正十五年八月、信濃富士見の原を訪ぶ  
足なやめる我がおそ歩み山こえて富士見高

原に立つが嬉しさ  
山かぜのつぎて吹き来る高原の秋草しきて  
友とかたれり 今井 邦子

（敏夫）此二首、今井氏として決していい、作ではあるまいと思ふ。割合ならかにまとまつてはゐるが然しまとまることが、歌ではないのであるから。

第一首、時間の経過に就いて少しく敏感を欠いてゐる。「おそ歩み」と句切つて、六ヶ敷しい「歩み」の用法をなした上に「山こえて」と再び切れて、「立つが」に讀く表現上の欠陥が「立つが」の「が」に至つ愈々露骨に目立

つてぎこち無く、爲に「嬉しさ」が取つて付けたやうな他所行きの「嬉しさ」になり終つて全體を支配し切れずにある。作者の嬉しさはこんな小さな嬉しさでは無かつた事であらうのに。なほ「足」の働きが「歩み」「こえて」「立つ」と一首のうちに四ヶ所も使はれてゐる事は注意に値する。

第二首、折々よりもつと短い間隔で次ぎつぎに吹いて来る風に違ひはなくとも之「つぎ」はどうであらうか。もつと高原の風の氣持は出せないものだらうか、「友とかたれり」一寸春氣過ぎはしまいか。樂な氣持で歌を作るのはいい、がかうあつさり逃げては困ると思ふ。

（次郎）共に今井女史としては堅くなつて感情が出しきれない様に思ふがどうでせう。

み山には今朝もおきたる霜ならんこの紫の

霜は今朝も霜のおくらむで無い處に注意を要する。前者と後者とでは其内容に於て主客の相違がある。即ち「朝々置く筈であるが、この朝霜が降りるのであるが、今朝も亦降りてゐることであらう」との差があるのである。處が之「らむ」は第三變化（ラ變は第四變化）につく完了現在の推量を表す助動詞である故「霜ならん（霜なるらん）」と用ふるのは正格でない。作者は「今朝も霜がおいた事であらう」と云ひたかつたのであらう。之歌ではさうはならない。先ず直讀直解をやつて見れば「み山には毎朝霜がおくのであるが今朝も亦おいた霜であらうこの深い紫の色をした龍膽の花は」となるので、霜が龍膽になつてゐる。之は「らむ」の用法を誤つたからである。「み山には霜や降りけむ」とでもしたならば意は通る。

第二首は第一首よりいゝけれども、矢張りすつきりしない。稍の限定詞としてこの「冬

枯き」が概念化してゐると、「かわきもする

き」で「も」に餘情を持たした爲に急に調子が鈍つたのと、もう一つ結句「夕やけの空」と丁度十六武藏と云ふ遊びで愈仕方が無くなると雪隠へ逃げ込む様に他所の空へ逃避したのが不可なのである。處が之が他所の空が相

對的な場合とか、今迄のと取つて換へられる様に對立してゐるのであるならばまだよいので、之歌の様に「夕やけの空」に因果を結ぶ様な表現は更に悪いのである。

(次郎) よくなるべき所が其心持とそぐはない表現になつてゐるところがありはしまいか。

敏夫評は読むに草臥れたが、かかる評がどこまで正鵠を射ているかは正直なところよくは解らない。

それはさておき、六號雜記にこの欄の先の杉浦翠子の批評に対する反論が載つているので紹介しておく。それは「香蘭」の批評についてと題された川村浩のもので、一角鷗東氏に寄すとサブタイトル付のものである。

○この夜らを秋のなごりの蟲のこえ鳴き

(翠子) 「つひにいのちをはらむ」これだけの

ことをこんなに引伸ばしたに過ぎません。「秋の虫鳴きつゝひに命をはらむ」を三十一文

字にしなければならない短歌の使命も難い。

これには、「秋のなごりの蟲の聲」を改作した

いと思ひます。

これに対し角氏は「この評、見當が違つてゐる」と一言で片付けられている。

ガラス戸につきあたる蟻をあはれがり障子

をあけて灯によらしめし 橋田 東聲

(翠子) 「飛んで火に入る夏の虫」といふこと

があり、私などは橋田さんと反対に虫を外に追ひ出す方が彼の生命保健かと思ひました。

この評に対する角氏は「これは歌評ではない」と云はれてゐる。

そこで川村氏は、果たして歌評か、歌評でないか、それは三者（ほかに三澤澤人氏の傍証もある）の觀方の自由に任して置けばよい。

「歌評ではない」と云はれ、はどうも致し方あるまい、と結論づけている。

抜き書きすればこんな事になるが、二首共に一言で片付けられているためこれでは不消

化は免れない。翠子氏への反論が回りくどい

傍説や原則論の確認である個所は省いたが、わたしの読解力不足で充分に意を尽くせな

かつた。

しかしこの欄の批評は遠慮会釈のない所が痛快である一方、軒捨て御免みたいなところもあつて、実はもつと反論を聞きたい気もあります。さはざりながら歌評はその場のトーンや雰囲気、さらには評者の顔触れ（組合わせ）にも左右されるから、コーディネーターの役割がいよいよ重要ななる。

村野先生の編輯後記を引いておく。

○正月末には長く我々をご指導下さった北原先生の勞を犒ひ「近代風景」の前途を祝する藤の諸氏其他四五拾名の來會者があつた。其時發起人の一人である穂積忠氏は詩社に歸つて宿つた。

○本誌新年號の表紙其他について諸所より好評を得た、編輯者の一人として喜ばしく思ふ。酒井氏は本月中旬に上京される豫定である、穂積氏は詩社に宿した折四月頃より選歌を擔任出来る事となつた。

篠井氏も本年より復活し大いにやる曙光があつたとの話である。

21 香蘭 2024年5月号